

朱子全集 第七卷

第七回配本（全九卷）

赤彦全集 第七卷

定價 二千二百圓

昭和五年五月十五日 初版發行
昭和四十四年十一月二十四日 再版發行 ©

著 者 久保田俊彦

發行者 岩波雄二郎

發行所 株式會社 岩波書店
東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三

凸版印刷・三水舎製本

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

文藝と教育に關する論文及び感想	七
流行と輕佻	九
鬼ヶ森の怪物	一二
我校弊ヲ論ジテ同人諸士ニ訴フ	一四
村勢調査	二〇
父兄懇話會	二三
研究錄	三一
彙報	三六
動物性と人間性	四一
獎善會	四九
職員會誌	五一

明治四十四年.....五

明治四十五年.....五

訓練綱要.....五

一心の道.....六

就任に際して.....七

高等學校.....七

山上漫語.....八

長野縣より何を出したるか.....八

病人に與ふ.....九

復古とは何ぞや.....九

女及び女教員.....一〇

鍛鍊せられざる心.....一〇

犠牲.....一〇

多言.....一三

容さざる心.....一三

師範教育	一三五
再び師範教育を論ず	一四〇
理科號の末尾に記す	一四〇
教育者の種類	一四一
青年教育	一四四
鍛鍊と徹底	一四六
松井須磨子	一六七
遠近	一七〇
速成者速變者	一七六
兒童自由畫展覽會につきて	一八四
少數者	一九四
山	二〇〇
二則	二〇四
後二則	二二一
訓育號の終りに記す	二三〇

田中新藏翁に就きて……………二三四

中等學校の訓練……………二二六

訓育問題 其二……………二二三

亡人錄……………二二六

辭任の辭……………二二五

東西記……………二四七

或る先生の話……………二二五

東西記 つづき……………二二五

岡田氏の訓示を読む……………二七〇

文藝と教育……………二七九

月 並……………二七九

東洋藝術の傳統……………二九一

子供に關した藝術……………三〇五

短歌童謡より見たる一般表現 ことに綴方に關して……………三二三

一般表現と教育……………三二三

短歌と表現……………三三〇

生活と表現と價值……………三三七

童謠と教育……………三三五

藝術教育の疑點……………三三九

川井訓導の修身教授問題……………三四二

消息・編輯便 其他……………三四五

「比牟呂」消息其他 明治三十六年……………三四七

「比牟呂」消息 明治三十七年……………三五二

「比牟呂」消息 明治三十八年……………三五六

「比牟呂」消息其他 明治四十一年……………三五五

「比牟呂」「アララギ」消息其他 明治四十二年……………三六九

「アララギ」消息 明治四十三年……………三六六

「アララギ」消息 明治四十四年……………三九〇

「アララギ」消息 明治四十五年・大正元年……………三九三

「アララギ」消息	大正二年	四〇〇
「アララギ」消息	大正三年	四〇一
「アララギ」編輯便	大正四年	四〇九
「アララギ」 「萬葉集拾婦手」編輯便	大正五年	四四四
「アララギ」編輯便	大正六年	四七四
「アララギ」編輯便消息其他	大正七年	四九七
「アララギ」編輯便其他	大正八年	五二六
「アララギ」編輯便其他	大正九年	五五四
「アララギ」編輯便其他	大正十年	五七五
「アララギ」編輯便其他	大正十一年	五八八
「アララギ」編輯便其他	大正十二年	六〇〇
「アララギ」編輯便其他	大正十三年	六〇七
「アララギ」編輯便	大正十四年	六四六
「アララギ」消息	大正十五年	六七一

文藝と教育に関する論文及び感想

流行と輕佻

流行々々、又流行、忽ちにして來れば忽ちにして去り、忽ちにして去れば亦忽ちにして來る。其の來る時は、怒れる虎の如く、其の去る時は鼠の如し。

吾人は今日我國民が浮萍泛々流行の炎熱に是れ狂するを見て、其の嘗て蒙りたる彼の「輕佻」なる冠詞は、未だ全く其の頭上より拭ひ去る能はざるを知り、其の惡意義、無頓著、無分別なるを浩歎せずんばあらず。

福島・郡司二氏の快報一度至るや、甲報じて傳へ、一國民は忽ちにして殆ど狂す。而して今や即ち冷然淡如たり。其の狂するや、直ちに二氏其の人を知つて、其の壯圖を賞讃し、而して是に狂する猶且つ可なりと雖も十中七八は皆是れ流行の爲に狂するなり。若夫れ然らずとせんか、獨怪む。北里博士歸朝の當時何を以て國民は是に熱中し、是に狂奔せざりしかを。噫、北里博士の學業豈福島・郡司二氏の壯圖に譲るものならんや。而も國民の是に對する待遇は實に冷々淡々たりしを思はば、又以て

我が國民が彼の二氏に狂したりし所以を測知するに足らんか。更に眼を轉じて文學界の狀勢を視よ。曩時泰西の文學に狂奔し、天下の文人皆我を忘れて彼に熱中したりし當時は如何。彼等は口を極めて固陋と侮り、因循と嘲りしに非ずや。而して彼等が今日講ずる所の書は果して皆依然たる泰西の文學か。新聞紙報じて曰く、方今和漢文學、詩歌、俳諧の流行熱は實に全國を擧げて其の度を高うし、是に關する幾多諸雜誌の發刊は、爲に洛陽の紙價をして騰からしむるに至ると。噫、昨は冷に今は熱す。忽ちにして鞭ち、忽ちにして撫し、忽ちにして疎し、忽ちにして親み、忽ちにして怒れば忽ちにして笑ふ。我國民流行の變遷何そ夫れ斯の如く漂々として而も斯の如く浮々たるや。聞くが如くば、現今東都武學生の増加は往年に比して、愈々隆盛の端に赴くが如しと。吾人は柔弱俗を成し、軟懦風を成すの今日この兆候あるを聞く。寧ろ拍手喝采せんと欲する者なり。然りと雖も之を追想せば、往年法律學書生は夏天の驟雨の如く、忽ちにして來り、又忽ちにして去りしを。嗚呼、朝晴暮雨變幻倏忽明日の天候吾人亦豫め期する能はざるなり。

抑も方今我國の文明は其の源や實に泰西に發す。吾人は今に方つて事新しく是を喋々するに非ずと雖も、我國人民は今日にあつても、未だ頭を白皙人種の前にあぐる能はざるものあり。

視よ。今日文明の利器として我國に運用せらるる所の者を。我國の依て以て便を蒙り、利を蒙る所の百般の事物は盡く皆源を泰西に仰ぐに非ずや。噫、電信は白人に依つて發明せられたり。蒸汽車は

白人に依つて發明せられたり。その他軍艦の製造より、百般の學理より、國內諸般の制度に至る迄皆標準を彼に取らざるはなし。今日彼等が横行濶歩傍若無人の振舞ある、未だ遽かに以て理なしとす可からざるなり。堂々たる神州の臣民、將に唾手蹶起一意専心憤發激勵前んでは前代未聞の學理を發明し、未曾有の新機械を發明し、茲に更に文明の一新天地を開き、彼をして之が恩恵に光被せしめ、退いては二千五百餘年來皇緒連綿金甌無缺の神州を以て自稱し來りし我帝國の體面を確保し、以て彼が高慢の鼻を挫くに非ずんば遂に膝を文明社會に、白哲人種の下に屈せすんばあらざるなり。秋津洲中幾千百萬の國民誰か甘んじて彼が背後に尾して、惴々累々たるをこれ欲する者ぞ。

嗚呼、方今我國臣民たる者は實に斯の如く夫れ絶大の志望を有せざる可からず。然るに其の爲す所を視れば即ち浮萍泛々として底止する所なく、實に無頓著、無分別の極と謂ふべし。一念茲に至れば浩歎の情禁せんと欲して禁する能はず、抑へんと欲して抑ふる能はざるなり。噫、絶大の事業は須らく絶大の偉人をまつ。輕々浮漂の國民將又何の恃む所、何の望む所かあらん。滿天下の少年諸君よ。諸君も亦是れ未來神州の組織者なり。知らず其の決心覺悟果して如何。

草し終つて一讀すれば行文澁滯殆ど誦するに堪へざるものあり。讀者幸に拙なるを咎めず寸意の存する所をくまば幸甚。

鬼ヶ森の怪物

去年の夏の事なりし。或る夜余は所用ありて、一里許り隔りたる隣村に行き、歸途鬼ヶ森と云へる名のみだに恐しき木下道にかかりぬ。時に日は已に西山に落ちて四邊暗黒、往々にして道を失ふ。颯と吹き來る一陣の凄風、胸のあたりを嘗められつつ、最と物凄しと唧ちつつ、フト見れば思ひきや、余が眼前三四間の處に、怪しの白物模糊として現れ居らんとは。アツト叫んで逃げ出さんとせしが、流石に思ひ留まりて路傍にかがみ、能々見るに、怪物は漸次余が方に向つてねり來るに似たり。其の狀圓なるかと見れば又然らざる如く、左するかと見れば又右するが如く、今は早余が前方二間許りの處迄進み來りぬ。走らんか、彼已に近づけるを如何。叫ばんか、人里離隔せるを如何せん。これまでなりと心を定め死地に陥れる兵ならねど、忽ち余は絶望の勇氣を振ひ起したり。震へる足を踏みしめて、兩手に滿身の力を込め、氣相變^{きさへ}へて身構へし、ヤーと叫んで怪物に飛びかかりぬ。怪物は正しく我が手に觸れたりと思ふ瞬間、彼は驚嘆の聲たかく、

盜賊——ッ、……人殺——ッ……

事情分れば倍も可笑や、彼の白衣の怪物と言へるは、世に恐しき化け物ならで、隣村の繭賣商人が首に縛り附けて背負ひゐる繭袋（繭袋は皆白衣にて造るものなり）にして、彼も今宵同じく此の闇路に通り懸りて、餘りの暗さに恐入りて、四つ匍ひになつて四邊に道を求めつつありける所なりしと。雙方の事情分り來りし其の果は大笑となりてすみけるが、己が心のひがみより、罪もなき繭袋に飛び附きしのみかは、他人の膽を潰せしこと、かへすがへすも氣の毒なることなりき。

あはれ世の少年諸君よ。己が心正しからねば、正しき人の心迄邪^{よこしま}りて見ゆるものぞかし。

（明治二十六年十二月「少年文庫」第十卷第五號）

我校弊ヲ論ジテ同人諸士ニ訴フ

短所ノ暴露ト進歩

我校ニ對スル研究ヲ起セ

主張ナキ親密ト腐敗

研究心

五時間ノ授業ト疑問

職員會ノ寂寥

社會ニ對スル交際

學校ノ威嚴

殊ニ校長ニ望ム

生徒ニ對シテ